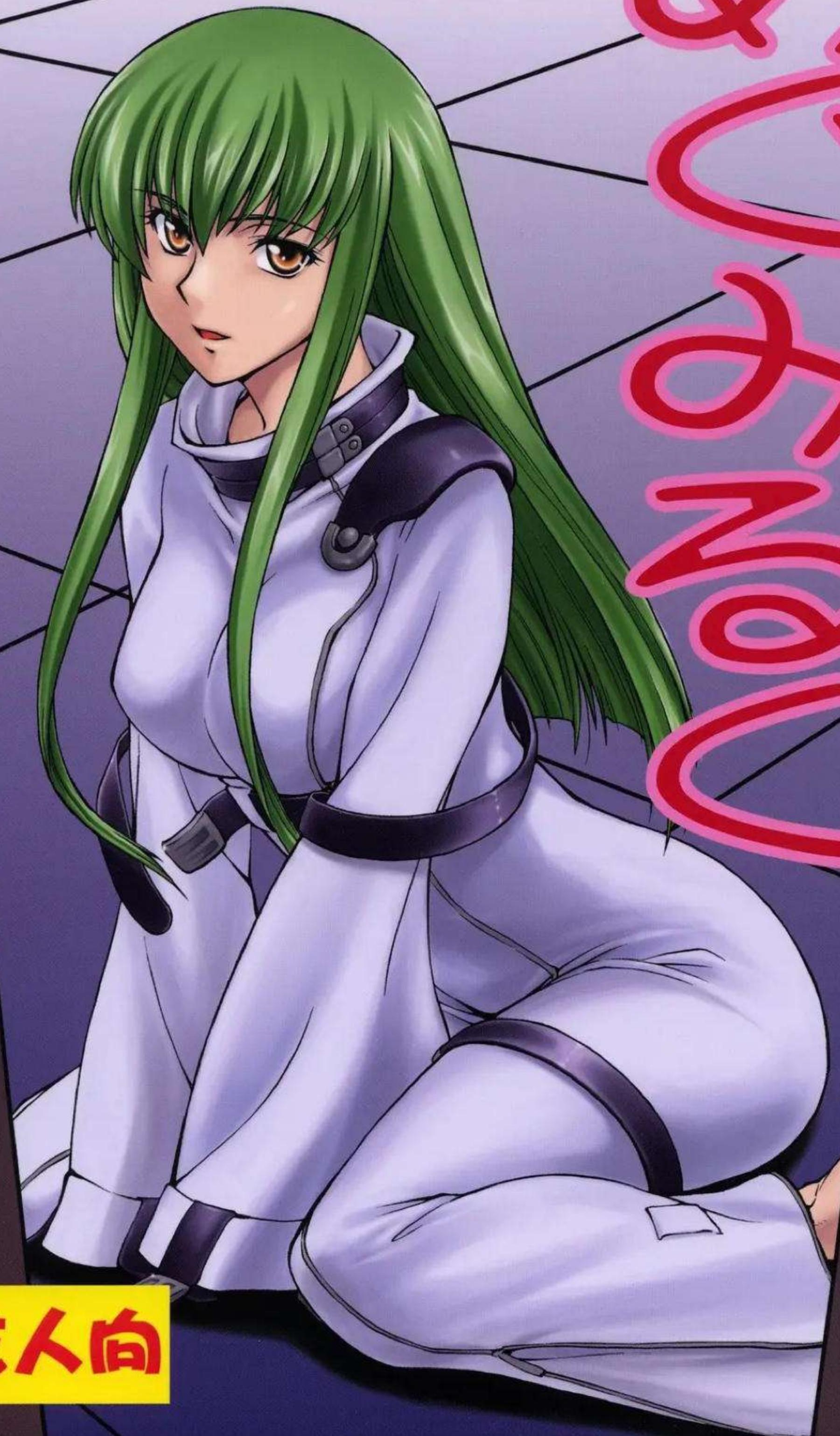


め
め
め
め



成人向

め
め
め
め



目 次

表紙

イラストレーション 流一本

中扉

イラストレーション 流一本

目次

2

ギアスコミック(こみっく)

流一本 3

皇女調教(SS)

白騎 15

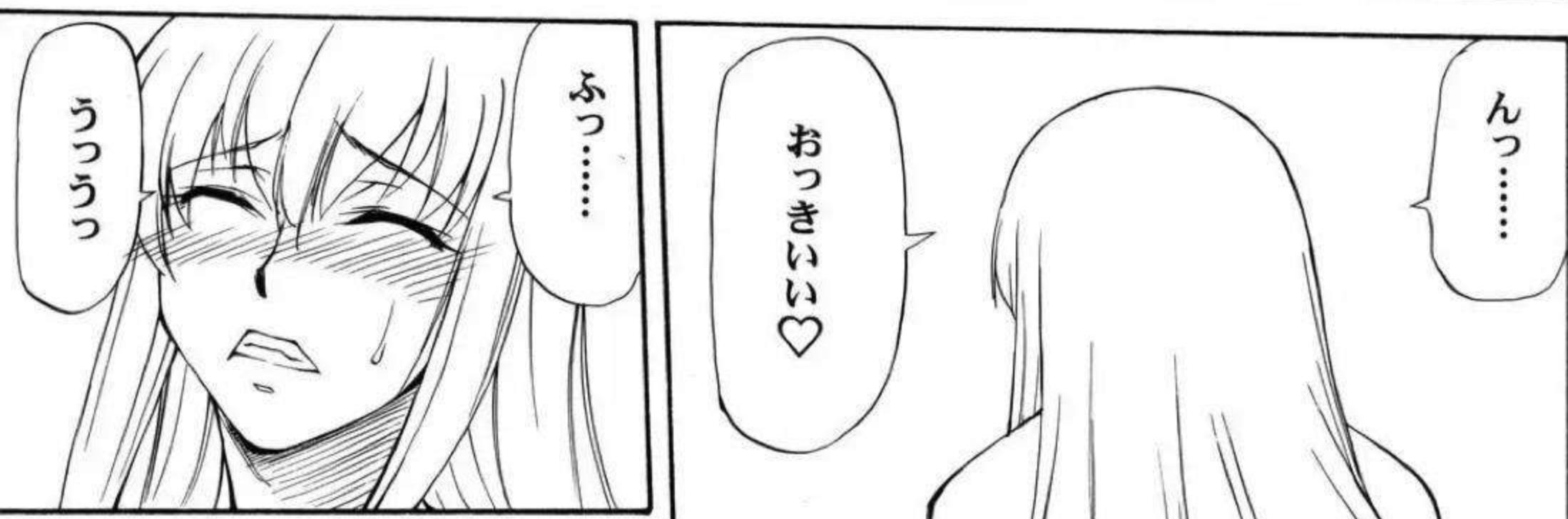
イラスト

流一本&くろうさき 22

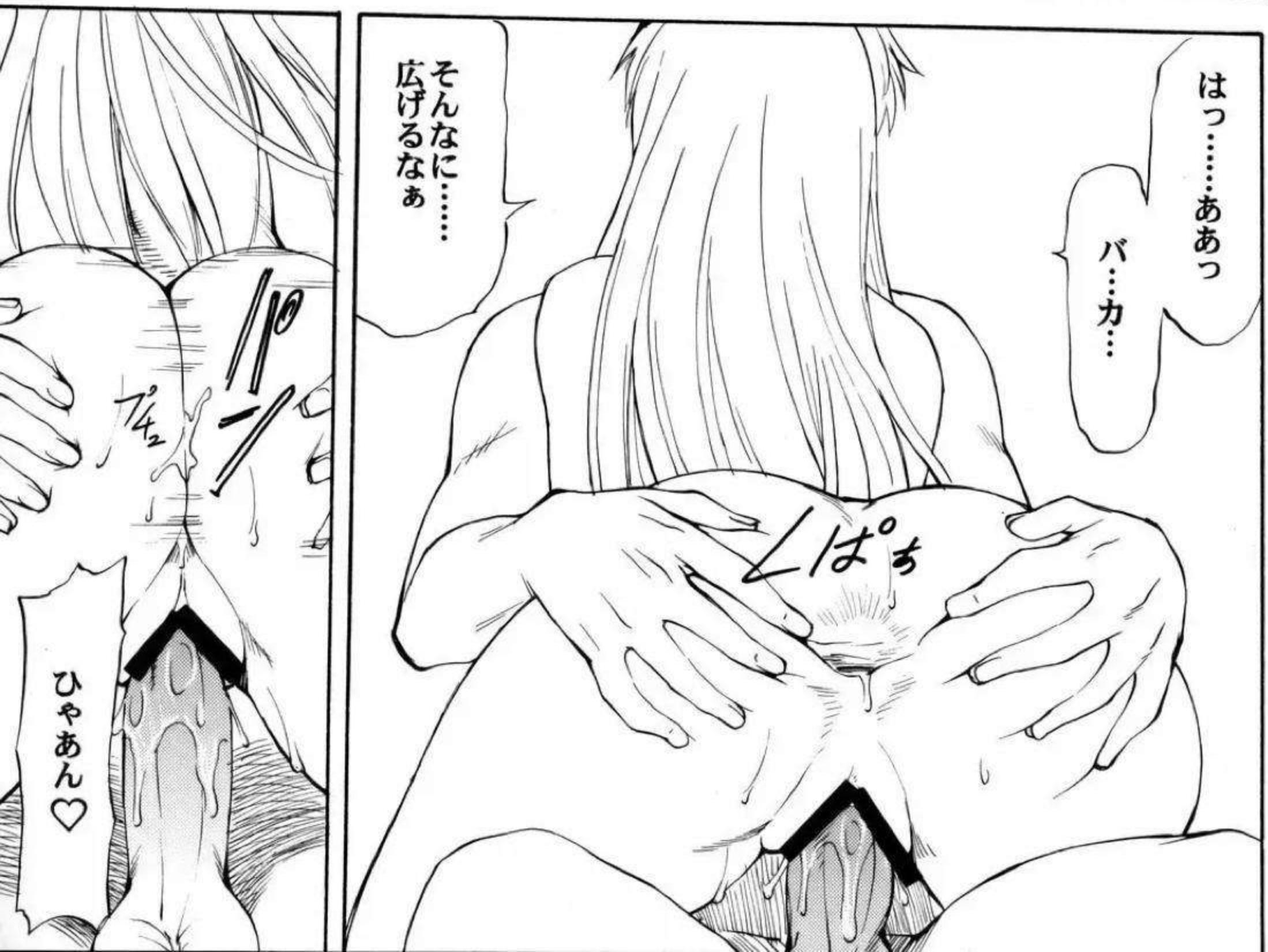
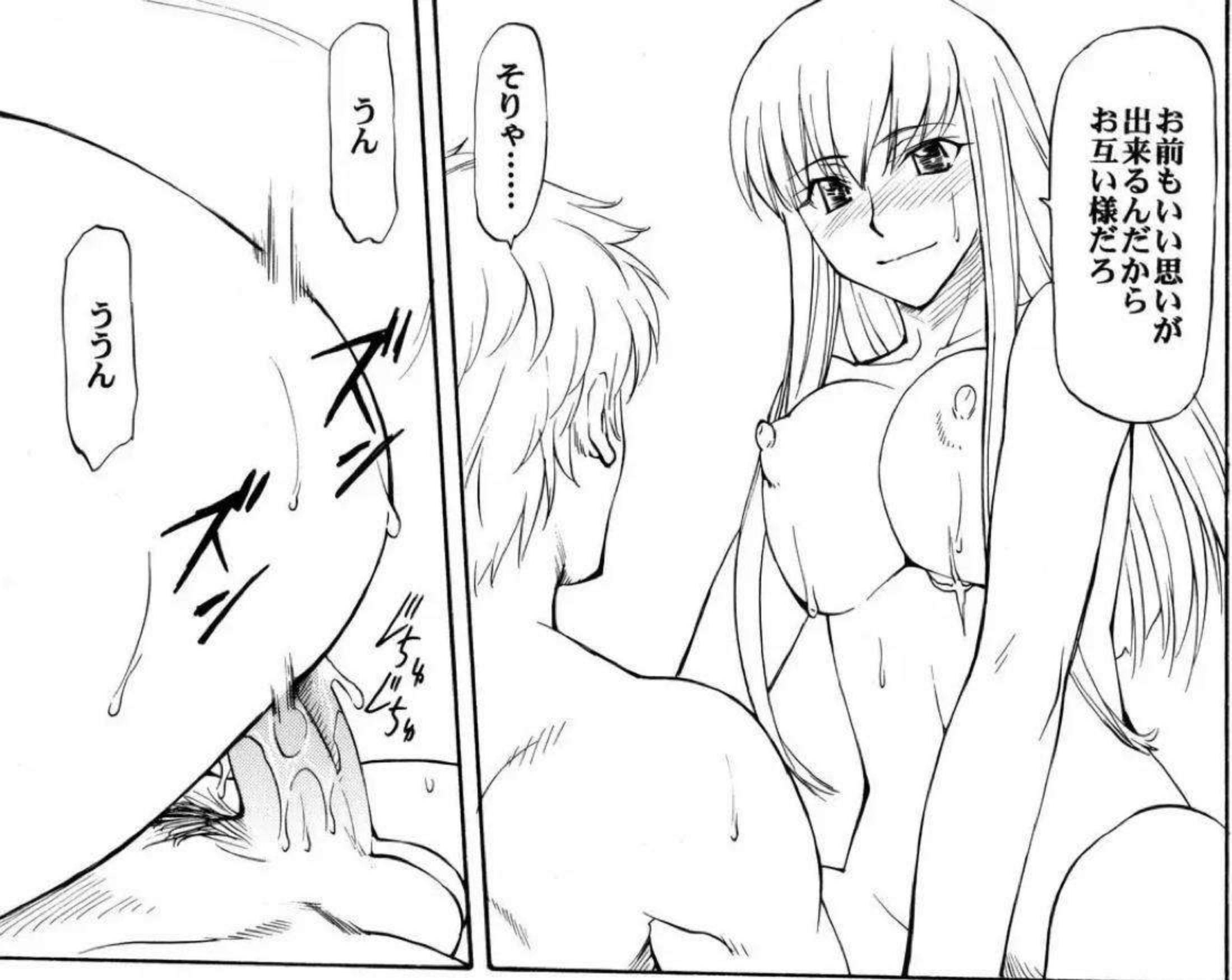
奥付

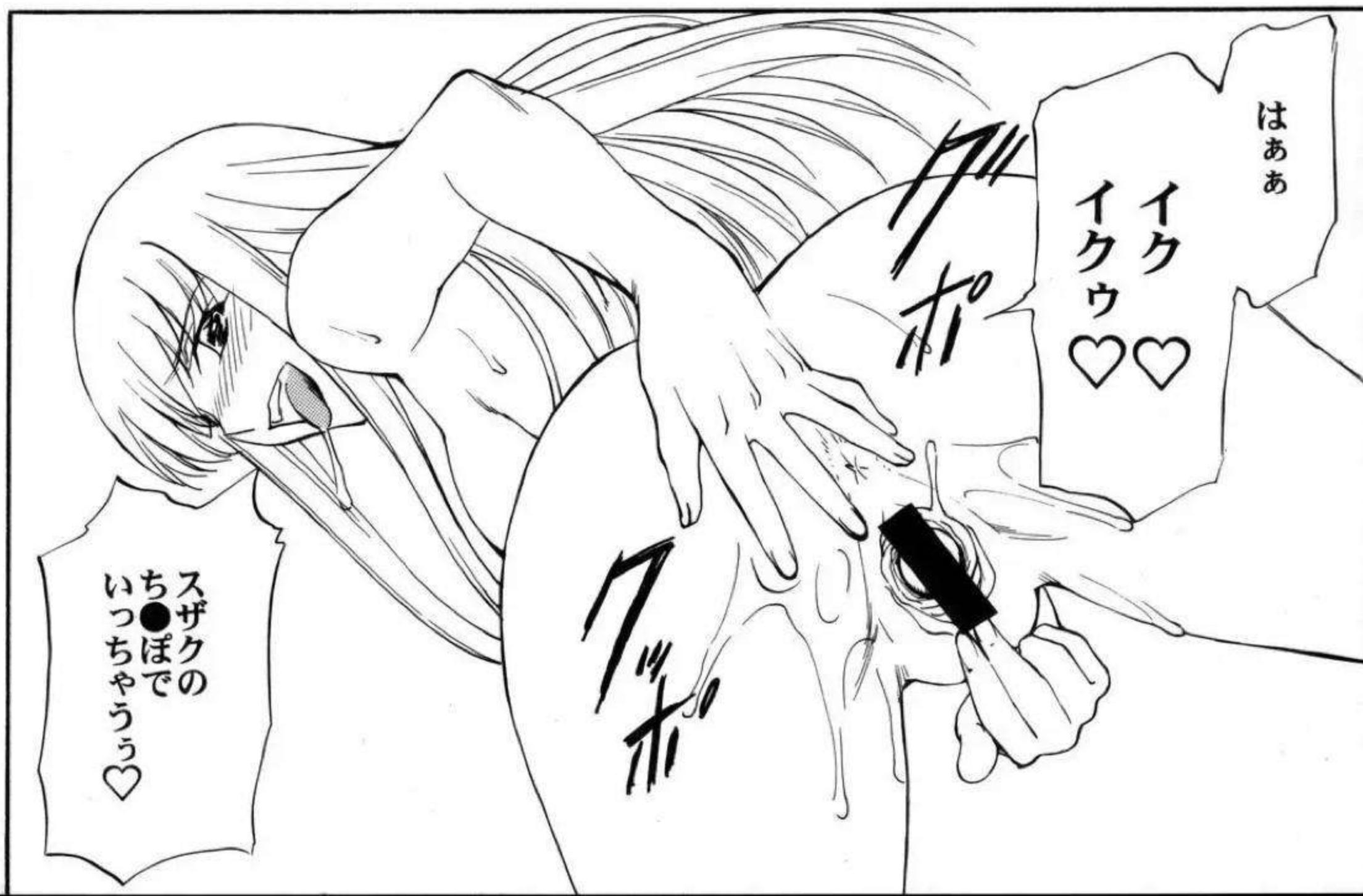














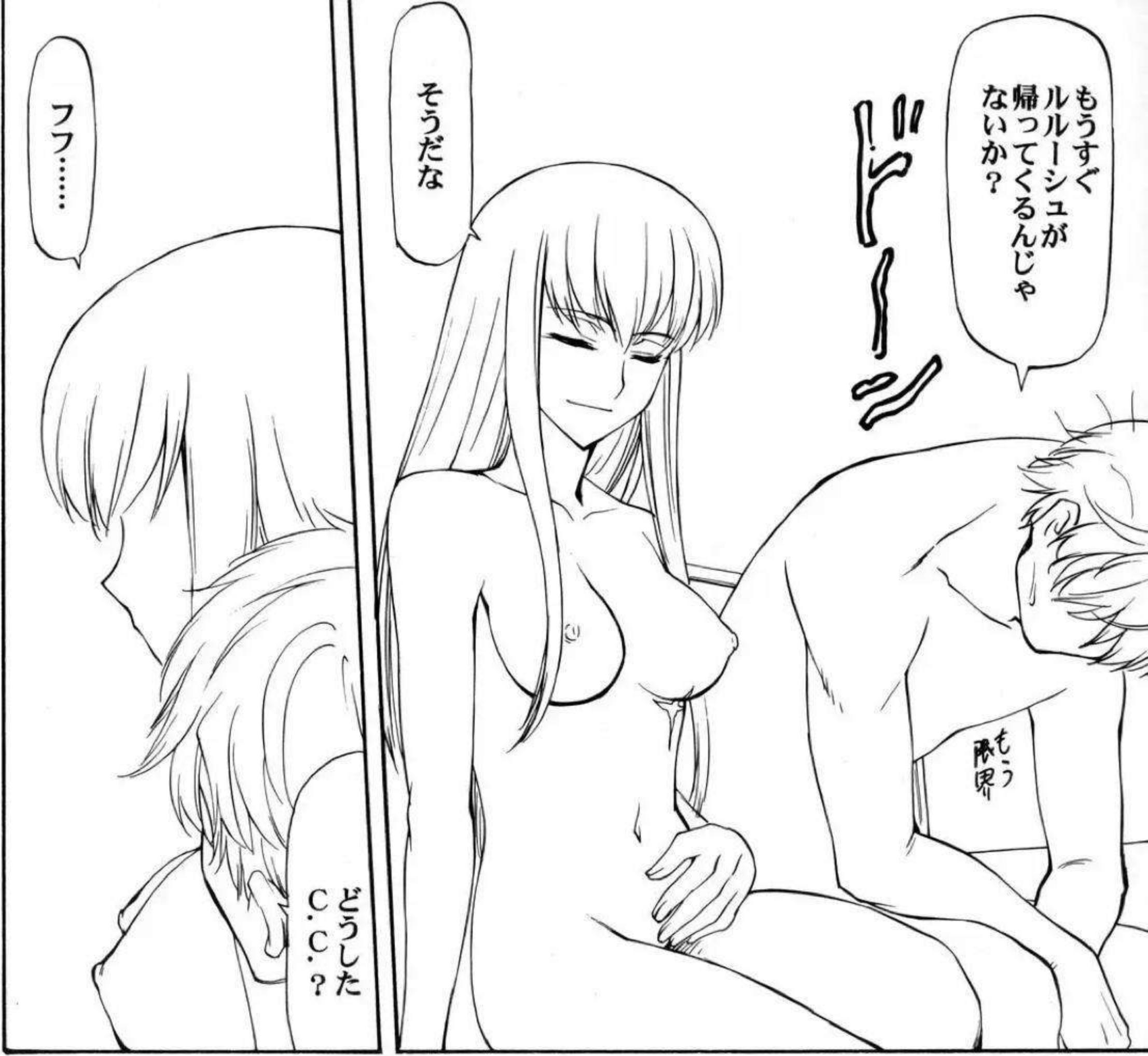


おつほおお♡









皇せ調教

著者 白川

黒の騎士団の一室。

ユーフェミアはゼロの賓客として一室に案内されていた。

少々手持ち無沙汰ではあるが、ゼロとの協定を結ぶためにも我慢は必要だつた。
ウイーン……

かすかに電動音が聞こえてきた。音の発生源を部屋を見渡して探つてみると、どうやら隣室
からなのようだつた。

ドアがあり、近くに寄り耳をそばだてるとい層響いてきた。興味がめばえゆづりドアノブ
を回して部屋へと侵入する。耳を澄ますと、人のぐくもつた様な声と電動音がしてゐた。僅かに
むせる様な体臭が鼻につく。

「え？」

奥の壁際のベッドの上に人が横たわっていた。

シーツが掛けられ、顔の上半分だけ見えていた。視線が絡み合い、何か苦痛を訴え
ているように感じて、ベッドの横にまで寄つてみる。

「具合が悪いのですか？」

「…………」

瞳で何か訴えていたが、うなり声のような返事しか返つてこない。顔の下半分を隠してい
るシーツをそつと捲つた。彼女の口には真赤なボールのよつたものがかまされていて。

「な、何、何な、れ？」

醜づぽくて甘い体臭と青臭い匂いが今つと立ち昇つた。

そこには寝ていたのは、アンソラード学院の制服に身を包んだ女子だった。制服のままベッ
ドに横たわる姿は、アンバランスな情景を描き出していた。ゼロに呼び出された部屋で、このよ
うな情景に出くわすなど思つてもいなかつた。ユーフェミアは一瞬パラックに瞼つたが、すぐに状
況の把握に務めた。

カレは制服姿だが、その手は、後に回されてなにか固定されているようだつた。

敏くちやになつた制服のスカートが膝上まで捲れ上がり、太腿があらわになつてゐる。

上半身の制服はボタンが引きちぎられ、胸元が露出している。形の良い乳房が片方だけ剥
き出になつていて、薄暗い部屋の中で目を凝らすと、その乳房の周りにはかなり乱暴に扱わ
れた痕が見える。精液と汗と愛液の交じり合つた匂い溢れてきた。

「どうしたの？ なにがあつたの？」

口に嵌められたポールギヤグを外し、背中で拘束されている両手に嵌つてある皮製の拘束具
を外す。

拘束具はベルトのように締められるタイプで、すぐに外せた。横たわつた彼女の股間から、
電動音がし、捲れ上がつたスカートから奥がちらりと見えたときに目を瞑つた。

「……これは……なに？ なんの……」

カレはショーツを穿いてなかつた。大陰唇の中央から歪なモノが覗かせてゐる。ユーフェミア
は恐る恐る歪なものを掴み抜こうとしたが、衝撃的な情景に指が震え、掴もうとした指が滑
て歪なモノに衝撃を加えてしまった。

「ああ、だめっ！ ダメえええ！」

カレが悲鳴をあげて上半身を揺つた。仰向けになつたが、下肢をVの字に投げ出して股を開
くようとした。まるでユーフェミアに見せ付けてみたいただつた。

「ひ」

ユーフェミアは驚いて一步退いてしまつた。

先ほどまでは近づいてうまく認識できなかつたものが、一步退いたことでよく見渡せる
ようになつた。カレの秘部がくちかりと視界に入る。ユーフェミアは自分のヴァギナさえ見たこ
とがない。だが、これが異常な事態であることは理解できた。

「な、なんて……」

薄いヘアのまばらに生えた恥丘の下、ぼくんと赤い秘芽がある。包皮を捲り返して勃起した
それは、根のところが茶色っぽい紐で結ばれて、腫ててに膨れ上がり、

「ゆ、ゆーふえみあ……」

カレは朦朧とする意識の中でユーフェミアを認識した。

ユーフェミアは恐怖を負けて逃げ出しそしまいそうな自分に叱咤した。

「だ、大丈去ですか？ い、今……と取りますか？ ……」

ユーフェミアは秘芽を絞り上げて、輪から伸びて先を引張つた。

「だダメエ！ や……、ティタッ！ 痛いッ！」

ユーフェミアは怯みようになる自分を再度叱咤し、紐を引く指先に力をこめた。ピツと音が
して蜜液が飛び散り、クリトリスがぐうと伸びる。

「ああ、い、い、感しやうつ！」

輪がヌルッと外れたが緊密化した小指の先ほどの陰核が、ブルブルと揺れた。

「イーラーうううう！」

カレンの体が小刻みに震えだし、まるでセクスの最中のよう腰が上下に揺れた。大陰唇をめぐりかえして、膣の真ん中にもぐりこんでいるバイブレーターが、今までとは比べ物にならないほど振動していた。背中が弓なりにせり上がり、人形のように硬直する。豊満な乳房がゆきり揺れ、その頂上に小さくピノク色の乳首が硬く尖っている。

ユーフェミアは、その光景を恐ろしいものを見たかのようになって、目の前の現実を否定するかのように首を振りながら後ずさった。

オーガズムに達したカレンは、女でも艶かしい体を曝け出していたが、あまりの異常性に狂乱を引き起としていた。

後ずさりしていたユーフェミアの肩を、背後から誰かが掴んだ。ドアは閉しられたままなのでこの背後の人物は最初から部屋の中に居たことになる。

「放置プレイっていうんだ」

「ルルーシュ！」

「身動き出来ないようにして、エッチな道具を仕込んで放置しておく、そうすることね。イヤらしい状況のカレンは、自分に今までやることを想像して、どんどん快感が強まり、最後には勝手に達してしまうんだ」

「なんだ……、ことを……」

ユーフェミアは、右手を振り上げて、ルルーシュの頬に叩きつけた。

パンツと乾いた音が室内に響き、ルルーシュの頬が赤くなる。十分にスナップの効いた一撃

に、ルルーシュは面白がつているような表情でユーフェミアを見る。

「女の子になんてことをするの？！こんな酷い事をするなんて……、わたくしは絶対に許しません！」

そこに割り込む声があった。

「皇女様……、私は進んでゼロに体を捧げているの……、私とゼロ様との関係を邪魔しないで……」

カレンはユーフェミアに見せ付けるように腰を浮かし、Mの字に股を開いた。既に、振動が止まっていたバイブを自分の指で、秘所から抜き出していく。途中にある歪な「コボ」が膣肉に引っかかり中々抜き出せない。

「あ、はあ……、この「コボ」が……、んん！……はあ！」
バイブが引き出されていくにつれて、赤い膣壁がめぐりかえる様子は自分で見ていてもドキドキする。くちゅりといやらしい音が鳴った。ようやくのことでバイブレーターが抜けた。いつもならかわいらしく収縮している膣口がバイブの形に広がって、膣壁の内側の内壁のピンク色が鮮やかに見える。

シリコン樹脂のバイブは、カレンの蜜にまみれてつづらじ湯気を立てている。

「ゼロ様、メス奴隸の私、ゼロ様の素晴らしいチ●ポを舐めさせてください」

カレンはさうかない様にベッドから降りると、ゼロ……ルルーシュの足元に両手をついてお辞儀した。

「よかろう」

ゼロは、マントの前をはだけて腰がカレンの前の位置に来るまで歩み寄る。カレンは、嬉しそうにゼロの股間に服の上から愛しそうに指を這わせる。ゆっくりとカレンはゼロの股間の一物を取り出してゆく。

「ゼロ……」

ユーフェミアは怖そうにあとずさると、壁に背をつけて現実から逃避するように必死で首を振りた。

「や、そ……そんな……」

カレンは、ユーフェミアにまで聞こえるように、ワザと大きな音が出るように男根を舐めしゃぶた。より一層イヤらしく見せ付けるように、テントを張った男根に頬すりしたり、舌を大きく出して陰茎を舐めたりする。

（よく見なきい……、ブリタニアの皇女さま……）

「はあ……、あ……んん、はあ……はあ……ああん」

ユーフェミアが声を荒げ始めた。もしもじと腰を揺らして、ルルーシュとカレンの痴態を見て興奮しているようだった。

「ゼロ……様の子・ボ、あ、んん……お、おい、いです」

声もユーフェミアに聞かせるために、ワザワザ大きな声で放つ。

かわいそうなくらいにユーフェミアは動揺している。カレンの内にはブリタニア皇女より上位に立ちたいという優越感が芽生えていた。

ゼロは、男根に奉仕を受けている間にも、カレンの乳首をじっくりしている。ずっと放置プレイで昂ぶっていた体は今にも達しそうになる。

「調教したかいがあつたな。カレンがんなにいやらしい奴隸が似合つなんぞな」

「調教……、調教……？」

「オウム返しのようユーフェミアの呟きが口からもれる」

目の前の痴態。放たれる言の葉。ユーフェミアの呆然とした脳髄には意味を伴つて認識されないよう見える。

「ゼロ様、お情けを頂きたいです」

「いいだろ。どうちに欲しい？ 前か？ 後つか？」

カレンは疼いている子宮にたっぷり精液が欲しかったが、より一層ユーフェミアに対しての優越感そしてユーフェミアに敗北感を与えるために後者を選択した。

「後で……」

「よからう。そんなに尻の穴に欲しいか？」

「ははい！ カレの……ア、肛門はゼロの……チ●ポが……欲しくてたまりません！」

「お尻……、あ、なる……」

壁を背にして力無く座り込んだエーフエミアから反芻する呟きが聞えてくる。全てはゼロの計画のまま進んでいる。ゼロは仮面の下で唇を歪ませる。カレンは四つん這いになり、上半身を伏せてお尻を突き出した姿勢をとった。ゼロは、小さめの肛門ローターをカレに手渡す。

「コレを自分で入れるんだ。そして……、自分で穴をよく広げろ！」

カレは命令を頬を朱に染めながら、嬉しそうに受け入れた。

「はい、ゼロ様、ご命令に従います」

カレは後ろ手に探し、秘裂の愛液を指先でくすぐり取り、それを自らの菊花に塗りつける。それを数度繰り返し、指先を突き入れて入口を確保してから、肛門ローターの先を押し付けた。シリコーン樹脂のローターは、指先を押し込めばあざり沈むはずだったが、ゼロがローターのオノにして振動させたので、お尻の穴が緊張してうまく入らない。

「ん、んん、はあ……んんんんー！」

カレは焦って尻を振った。緊張で発汗した液体が尻にシワリと滲む。折角ほくした菊花が

緊張で収縮してしまう。

「私がいれてやうう」

ゼロは、カレがてずつているローターを取り上げると、菊花の下にあるモフ欲しそうにピクついた膣口に指先で沈ませていく。

「きあう！ あ、ああ……」

ゼロは、カレがてずつているローターを取り上げると、菊花の下にあるモフ欲しそうにピクついた膣口に指先で沈ませていく。

「ゼロ様……はあ！ あ、ありがとう……」

ゼロは、カレがてずつているローターを取り上げると、菊花の下にあるモフ欲しそうにピクついた膣口に指先で沈ませていく。

煩悶するのに今は、膣内には振動を続けるローターが入っている。

「はあ、いやあ！ やめう！」

アナルと膣を同時に攻められるのを思い描き、カレは未知の恐怖を感じてゼロに中止を懇願した。ゼロはすぐさまソックスを切り、カレの尻と手を叩き下ろした。

「パン！」

「きや、い、痛い！ はあん」

「パン！ パン！ パン！」

「聞き分けのない奴隸だな……」

「あ、ああ……ゼロ様……も、申し訳ありません……」

息もたえだえにカレはゼロに謝罪する。

ゼロは、正なバイブを赤く染まつた尻から這わせるように下に降ろし、ローターを入れっぱなしの膣袋と押し込んだ。バイブにある突起物が、膣袋を巻き込みながら奥へ奥へと進んでゆく。

「あ、ああ……ああ……」

「やめう！」

ユーフエミアはかすれた声でゼロとめめつとした。

「ゼロ……、ダメです！ その子が死んでしまいますッ！」

静止の声はあがても、その意図に反して身体はドクリとも反応しない。

ゼロ……、幼い頃から知っているルルーシュはナリーニーのことを大事に思う優しい男の子だった。ゼロという仮面を被っていてもルルーシュには変わりないズなだが、ゼロという仮面がルルーシュにとり憑いた悪魔のように見える。

「いや、やめて……、こんな……イヤあ！」

しかし、カレはユーフエミアの狂態にも興味を示さずに、「腕を起して四つん這いになり、ゼロに向かって擦り寄つていた。ゼロは剥き出されたペニスをしごきながら、カレに覆い被さり、男根を尻穴に押し付けた。

「きやあ！」

室内に木霊した悲鳴は、突き入れられたカレのモフではなく、その嬌聲をいいたユーフエミアのものだ。めりめりつと粘膜がきしむ音がしてゼロの張詰めたペニスが、カレの尻穴に沈み込んでゆく。尻穴にはローターとバイブが入れられていて、お尻の穴はひしょげて狭くなっている。その尻穴に無理矢理ペニスを挿入している。

「ああ、いやあ！ い、痛い……。かはあ……。ま、前に入つてる。お尻、お尻が……。ああ

ツ！ ゼロのがツ……」

歓の性交のような姿勢で、ローターとバイブを膣内に入れ、肛門セックスをする日の前の

一人が、ユーフェミアが居る世界を壊していく。

「ああ……いい……たい……んはああ！」

「見ているかユーフェミア！」

ゼロに名前を呼ばれたことで、夢幻の世界に行こうとしていた意識が呼び戻される。身体も動き、立ち上がるとも出来た。ユーフェミアは、ゼロの肩に手をかけて、女の子を犯すルルーシュ引き剥がそうとする。しかし、弛緩したばかりの身体はゼロの行動の妨げにはならず。ゼロは、そのままカレンの尻穴へのピストン運動を続ける。汗でぬめた身体に滑り、ユーフェミアは床に倒れ落ちる。

「ああ！ 痛い！ た……助け……」

カレンの悲鳴に倒れた身体を引きずつて詰め寄っていく。

「どどが痛い！」

悲鳴に反応して、ゼロを止められないユーフェミアはカレン痛みを和らげようとする。

「ア、アソガ……くう！ いたい……はあ……」

ユーフェミア、ほアソコと言わせて解るほど知識はなかつたが、痛みを伴つてるのはゼロとの結合部付近だと考へ、身体を軽がし、四つん這になつているカレンの腹の下に上半身を押し入れた。至近距離で見たカレンの秘部はいやらしく液と匂いを撒き散らしていた。匂いに当たられたユーフェミアは、紅くふくらむ膚れたクリトリスへと舌で舐める。

「ああああ。いい。いいよおー！」

カレンの悲鳴が歓喜声に変わり、ユーフェミアは吸い付くようにクリトリスを愛撫する。膣奥でローターが振動しているのだろう。ヴィーウィーとかすかな振動音が聞こえてくる。ユーフェミアはしやむに手足を這わせ、クリトリスを舐めます。

目の前では、ゼロの肉棒がカレンのアナルに出入りするのが見える。その光景を間近に見ながら、無我夢中で秘芽を舐めしゃぶつていた顔のすぐ上の秘唇から、蜜液がトロトロと落ちて顔を濡らすが、それさえも気にならなかつた。淫らな嬌態にめり込んだユーフェミアはカレンが身体の位置を移動させているのに気付かず。カレンはユーフェミアのスカートのめぐり上げて、中のクロッチを指先で片寄せて秘唇を露出させてから、はじめて悲鳴をあげた。

「きやああ！ いやいや！ やめてえ！」

カレンはユーフェミアの秘芽に吸いついた。

「ちゅぱ、ちゅるちゅる……ちゅつちゅつ……はあ、ふくふく！」

ユーフェミアの秘芽はしうくじくに濡れていた。ゼロとカレンの淫靡な交わりを見て興奮をしていたらしい。カレンは暴れるユーフェミアに体重をかけ押さえ込み、秘芽をじゅるじゅると舐めしゃぶる。

「あ、だめえ、だめえええ、ひい！ いいい！」

カレンの同性ならではの執拗な攻めで、ユーフェミアはあけなく燃え上がりしていく様子がわかる。カレンの中で嗜虐性に火がつき、ゼロの下に奴隸として仕えるのは自分が上だと知らしめるために。カレンは秘唇をへちゃべちると舐め回し、膣口に舌先を突き入れたり、尻穴のシワヒタを舐めしゃぶつた。ひくひくと喉を鳴らして仰け反るユーフェミアの姿さらに嗜虐心が増す。カレンはもう一度秘華に口をつけた。

「ああ、やめ！ もう、もう、やめても……あ、ああ、いい、いいのお！」

ゼロはカレンに協力して、ペニスをアヌスに浅く入れたままじっとし、膣奥のローターとハイフを振動させないものありがたかった。

「おいしい……、プリタラの……、皇女様の……、こんなに、べちゃべちゃになつて……ちゅる、ちゅるるる！」

「ああ、だめえ……いい、気持ちいい！ だめ、だめよお……ん！」

ユーフェミアは、クンリングスの気持ちよさに常識を擱さざられ、快感と正氣を行きつ戻りつしているようだ。カレンは、上下関係を明確にするためにトドメを刺そうとする。いつたん唇を離し、息を整えると、もう一度クリトリスに吸いついた。根のところに歯を立て、クリトリスを根から引き抜く勢いで吸引する。

「あああああああ、ダメ、抜けちやう！」

ユーフェミアの肢体が、上から覆い被さつしているカレンを跳ね飛ばす勢いで暴れ始める。カレンの鍛えられたしなやかな身体が体重をかけて押さえ込む。その姿勢を維持しながら、なおも吸引し続ける。

「イクイクッ、イクッ！」

ユーフェミアが激しく痙攣し始めた。この体勢ではエクスタシーの瞬間の恍惚とした顔が見れないのが残念だが、ユーフェミアの秘部が、トロトロと蜜を溢れ出しているのを見ているだけで、躰が熱くなつてくる。やがてユーフェミアは、ひくつと喉を鳴らしてから、イイと声をあげて失神した。弛緩した躰はぐつたりとして、口の端からよだれを垂らしている。なのに、カレンがたうぶりと舐めしゃぶつた秘芽は赤みを増し、白い太腿とコントラストをかもし出して、なにもヒクヒクと痙攣している。

「イシたみたいね。はしたなくよだれを垂らして、自慰を剥いてる」

「ふふ、こうなると、プラタア皇后もただの女だな……」

ゼロの口の端に乗つた女という響きにかすかな嫉妬心がひろがつた。カレンは尻の穴に挿入されたゼロの男根を締め付けて紛らわせた。

「うう！」

突然、男根を厳しく締め付けられ、ゼロはうなり声をあげる。

「ねえゼロ様、今度は私を……」

カレンはユーフェミアに体重をかけてしまわないように腕を立て四つん這いになり、お尻を上げてゼロへおねだりした。

「いいだろう」

ゼロはカレンの尻をしっかりと持ち直すと、律動を開始した。

「ん、ああ、うう！ く苦しいう！」

カレンは四つん這いのまま、髪を振り乱す。乱れた髪が汗にまみれた肌に貼りつく。

「あ、はん！ 割れる！ 割れちゃう！」

灼熱の塊のようなペースが腸奥深く差し込まれると、気色悪さと排泄欲求、押し込まれるような圧迫感が同時にカレンの内を大波のように襲い掛かってくる。まして今は、腸奥にローターと一緒にペースを狭くしていた。カレンは滝のように汗を流し、唇を噛んで苦痛に耐えていた。

「はあ……ん！ かはあんん……」

ゼロがゆっくりと十度ほど律動をしたときに、カレンを襲っていた苦痛が裏返った。こんな快感がこの世にあるのかといつほどの快感と羽化した。

「あ、来たッ！ いいのう！ 気持ちイイ！」

カレンは苦痛が裏返って得た快感で頭を振り、腰を回して悶え狂った。

「う、カレ、カレ、カレ！」

ゼロもギックリ縮め上げる女の名を呼び、なおも尻を攻め立てる。

「あ、ああああ、いいの、いいのおおー！ ドンドンくるー！」

直腸壁と膣壁を隔てる膜越し、バイブの突起物と肉茎が擦れあう。亀頭が突き込まれると、直腸粘膜と媚肉の間の薄い膜を隔て、腸奥のローターがさらに奥へと押し込まれ、子宮口をクリクリと抉られる。そのたびに下腹の奥で子宮がキュウキュウと収縮して疼き始める。

「あ、ゼロ様、子宮が、し、子宮があ！」

アナルを攻め立てる単純だが強い快感に、子宮を内側から揺さぶられる感じが混ざり合う。

「あ、壊れる、壊れる、狂いそうー！」

ユーフェミアにクンクリンクスされた熱さがまだ残っている秘唇に、冷えた陰嚢がべたべたと当たってくる感触も気持ちよく感じる。ゼロは、ギチギチと締め付けてくる直腸粘膜の熱さに膣壁を痺れさせながらも腰を打ち付けた。肛門括約筋の蠕動運動が、男根を咥え込んでいる感触は、ノーマルセックスには無い麻辣のようだった。

「う、カ、カレ、もう少しで……、で出そうだ」

「ゼロ様な、中で……、はん……、中に、ください！」

「いいだろう。奴隸の、カレンの……ん尻の穴に精液を……注ぎ込んでやるー！」

「ははい……、お願いしますッ！ カ、カレンの、お尻だ、……くださいー！」

ユーフェミアより上位に立つために、ゼロの寵愛を受ける為、カレンはおねだりした。

「ゼロ様、奴隸の私はゼロ様の精液をくださいー！」

カレンは腸壁をキリキリと締め付けた。そして、ゼロが床に置いていたバイブのリモコンのスイッチを掴み取り、強に入れた。体をバラバラにするかのような強振動が子宮を襲い、薄い膜を離して直腸の中のペースも揺さぶった。

「うううッ、カ、カレンッ！」

「ドクッ！ ドクドクッ！」

火傷させるような熱い精液が、腸管の奥を打ち抜いていく。精液が直腸粘膜を爛れさせていく。

「あ、ああああー！ ゼロ様のが……、腸奥に、か、感しますうー！」

「子宮と腸管の奥で快感が交渉のようだ襲い掛かってくる。

「イクッ！ イクウッ！」

カレンは、体を弛緩させ緩んだ股間からは、温かな尿を流していた。その尿はユーフェミアの顔を汚してたが、止める事も出来ず、陶酔の甘い感覺に体を預け、意識が遠のいていった。

「ん、んん、ちゅぱ、カレン……」

「コライの脣、甘い……」

ユーフェミアとカレンが一匹の犬のように並びながら、首を差し伸べてキスしていた。ユーフェミアは白いドレス姿で、カレンは黒の騎士団の服を着ているが、一人とも服がはだけ、上半身の大半が露出している。一人とも乳房は剥き出しにし、ユーフェミアの方はスカートは捲り上げられ、ショーツは膝上にまで下げられており、カレンのズボンと一緒に太腿まで下げられていた。白と黒の眼を纏つた二人が、絡み合い肌を露出している姿は実に煽情的だった。ユーフェミアの膣口は少しだけ締んでおり、その腰が切なそうに揺れるのは、腸奥でローターが振動しているせいだ。ゼロは、片手でユーフェミアの太腿の弾力と感触を愉しみながら、カレンの膣にペースを差し込んでいた。

「ん、んん、ゼ、ゼロ様あ！」

カレンがブルブルと腰を震わせた。膣の中ほどの狭いところがよじれるように縮まり、膣壁が精液を請求するように蠕動する。内側に引っ張り込むような感覺が心地よく、ゆっくりと腰をフライドさせて楽しむ。カレンは切ない喘ぎ声をあげ、身体を振るわせる。

「ゼ、ゼロ様あ、私にもオチ●ポください！」

ユーフェミアがおねだりしながら腰を振った。

「コライにはローターを入れてるだろ？ バイブも欲しいのか？」

「ち、違います、ゼ、ゼロ様のオチ●ンが、ほ、欲しいの……」

ユーフェミアの膣はふんわりと肉がついていて、剥いたため卵を二つ並べたみたいに見える。

方、カレノは肉つきの薄く鍛えられた尻で、しかし、決して硬いわけではなく、女性の柔らかさを持っている。カレノがユーフエミアに負けまいと、膣襞をギュッと締めた。ツブツブがみつりとういた膣襞が、男根の周囲にみつりと押し寄せてきて、咀嚼するかのように揉み込んでくる。ゼロの律動がドンドン速くなっていく。真ん中の狭いところがブリトとした抵抗感を作っていて、心地よい。すくでも果て、その欲望がゼロを襲つたが、主人であることを教えたためにも扱いには気をつけねばならない。ゼロはペースを抜くと、ローターが入ったままのユーフエミアの膣口にペースを押し当てた。

「あ、あああ、入っちゃうー！」

ユーフエミアは甘い声をあげ、頭を振り乱した。髪が跳ねて、乱れ散った髪からは甘い芳香が放たれる。ゆっくりとペースを押し込んでいくと、ユーフエミアの膣襞が一斉にざわめいた。両者の異なる感覚に、瞬時にそうになるが、そのところを抑えつける。

やがて、亀頭が膣奥のローターを突き上げた。ユーフエミアはヒィと悲鳴を放ち、甘い声でおねだりした。

「ゼロ様あ、精液をくださいー！」

ゼロ様、私も、ください！」

カレノが対抗して声を張り上げた。ゼロは片手を伸ばして、カレノのアビアを引つ張つたり秘茎を指先で押さえたりして悲鳴をあげさせた。

「カレノ、君は、ゼロのなんだ？」

その言葉に、自分の立場を思い出して怯えが内に芽生える。そして、ゆっくりと答えを紡ぐ。

「わ、私は、ゼロの……、奴隸……です……」

「そうだ。私の言葉に逆らうな。いいなカレノ」

捨てられるのを怖がっている子犬のような表情で、カレノは頷く。ゼロはペースをユーフエミアへと一層深く貫いた。

「ゼロさまあ……、感じるー！ もう、もう、イキそー！」

カレノが腰を振ると、スイッチを横目で見ながら、ローターの振動に子宮を揺さぶられ続けていたユーフエミアは、ペースを深く入れられてすぐに絶頂間近の告げた。

「コライスイッチをいれるぞ」

予告するべく、ユーフエミアの膣がギュギュッと締まつた。快感を先取りして、躰がさら高まつたらしい。ゼロは、脇に置いてあったスイッチに手を伸ばし、スイッチをオンにする。弱に入れなのに、亀頭が痺れ上がるほど、の振動が始まつた。ユーフエミアの躰が震れ始める。

「あ、ああああ、イク、イキそー！」

「う、コライ……、で、出るぞー！」

「……、あ、コライ……、ゼロ様……」

カレノは四つん這いになり、ユーフエミアの下にもぐりこみ、結合部にねつとりと舌を這わせ

た。ゼロは勢いよく精液をユーフエミアの中になぎこんだ。射精途中に、カレノが肉茎の付け根と膣襞を同時に舐められ、勢いがさらに強くなる。

「ああ、ゼロ様のが……、溢れて……、じゅる、じゅるる」

「あ、熱いのが、熱いのよー！」

「ううう、コライ！ カレッ！」

射精を感じた途端、膣襞が狂つたように蠕動し、精液を子宮の中に収めようとすると、精液はローターで押し止められ、結合部から逆流していく。溢れた精液はカレノが吸い取っていく。

「じゅる、じゅる、ああ……、ゼロの精液、おおいしいです……」

「あああ、し、死ぬ、死んじゃううー！」

ユーフエミアは身体全体をヒクヒクと痙攣させ、悲鳴のような声をあげた。膣奥にローターが当たり、亀頭が入口を擦り上げ、熱い精液が行き場を求めて膣内から溢れていく。カレノが溢れた精液を舐め取りながら、子宮口や尿道口、クリトリスまで舐めまわす。同時に性感染帯を攻められ、ユーフエミアはあけなく失神し、カレノの上に横たわつた。ゼロがペースを抜くと、カレノはユーフエミアの膣口から溢れた精液をすり上げて、じゅるじゅると音を立てて飲み込んだ。それでも物足りなさうに、男根を咥えていた。

「あ、う、……、おいし……、ゼロ様の……、チ●ボ……」

惚けた顔は恐ろしく艶かしかつた。

ユーフエミアが失神から目覚め、カレノの横に膝をついて座り、ゼロのペースを舌で舐め始めた。自分達の愛液で濡れた肉茎を、たんねんと舐めしゃぶつていく。

「ん、ん、ん、コライ」

「ああ、んああ、カレノ……」

肉茎に舌を這わせながらも、二人は唇を重ね、執拗に男根と唇を舐めあっていく……。

終幕





あとがき代いのスタッフの日常つか、クチ

くろ 毎度お買いあげあいかとうございます。
白 見事なテンプレ挨拶ですな。
くろ テンプレって……
白 今回は環境が変わったせいか、原稿の侵攻が遅くなつたなあ。
くろ 侵攻ちゃないだろう。
白 今回のタイトルは、「めぐみるく」です。ちょっと工口く聞こえるだろ。
くろ わけねーだろ！
白 ちょっとギリギリで時間もないのに、次回は、どーだろ。

12月某日 壊滅した秘密基地

奥付

発行 リーフパーティー

発行日 2008/12/30

発行人 くろうさき

ホームページアドレス

<http://www.obaitai.ne.jp/~carmin60/>

印刷所 大陽出版様

LeLeぱづぱ

Vol.14

